

ジュール・ヴェルヌ 『海底二万里』のあらすじ

takaidos

読書メモ

本-海底二万里 2015-07-16～07-21

ジュール・ヴェルヌ。

1869年発刊。ヴェルヌ41歳。

荒川浩充・訳

南村喬之・挿絵。

挿絵の南村氏は1919年福島出身で戦後シベリヤに拘留された。

ウルトラ・シリーズや大人向けSMシリーズの絵など広く描いている。

原題の『二万リュー』のリューは4.444キロ。

88,880キロの海底旅行という意味。

日本の一里=4キロに近いので、二万里と訳されている。

海洋学、生物学、化学、地理、歴史。

<目次>

第一部

1.動く暗礁

2.賛否両論

3.ご主人さまのお好きなように

4.ネッド・ランド

5.盲滅法に！

6.全速力

7.未知の種のクジラ

8.動中の動

9.ネッド・ランドの怒り

10.海の男

11.<ノーチラス>号

12.すべて電気で

13.数字を少々

14.黒潮

15.招待状

16.平原の散歩

17.海底の森

18.太平洋下四千里

19.バニコロ島

20.トレス海峡

21.陸上での数日間

22.ネモ船長の雷

23.不快な眠り

24.サンゴの王国

第二部

1.インド洋

2. ネモ船長の新しい提案
3. 一千万フランの真珠
4. 紅海
5. アラビアン・トンネル
6. ギリシャ諸島
7. 地中海四十八時間
8. ビーゴ湾
9. 消えた大陸
10. 海底の炭坑
11. サルガッソ海
12. マッコウクジラとナガスクジラ
13. 氷床
14. 南極
15. 事故か突発的な事件か
16. 空気の欠乏
17. ホーン岬からアマゾン川へ
18. タコ
19. メキシコ湾流
20. 北緯四十七度二十四分、西経十七度二十八分
21. 大殺戮
22. ネモ船長の最後のことば
23. 結び

訳者あとがき

<登場人物>

ピエール・アロナックス: パリ博物館教授。40歳。フランス人。
コンセイユ: 召使い。忠告という意味。30歳。
ネッド・ランド: 鋳打ちの名人。40歳くらい。カナダ人。
ネモ: ノーチラス号の船長。ノーチラス号は70メートルあまり。
ファラガット: 米フリゲート艦エイブラハム・リンカン号の艦長。

<あらすじ>

1866年7月20日、ガバナー・ヒギンソン号が謎の生物が45メートルの水柱を発するのを目撃。
3日後に1000kmほど離れた海上で同様のものが目撃された。
1867年4月13日、スコシア号船体後方を損傷。
1867年5月5日、モラビアン号の右舷後部が何かに接触して損傷。

アロナックス教授は巨大な一角獣かもしれないと語る。

1867年7月3日。

海軍省長官JBホブソンより、アロナックス教授に乗船・調査依頼が届く。

そして、教授と助手、鋳打ち名人ネッドの3人は調査・退治するためにニューヨークから軍艦エイブラハム・リンカン号に乗船する。

大西洋から太平洋に出て3ヶ月が経過して見つからず、ファラガット艦長はあと3日間だけ捜そうと船員を鼓舞する。

11月5日正午。

ネッド・ランド、ついに謎の生物を発見。

生物に砲撃命中、ネッド・ランドも銚を打ち込むが生物がエイブラハム・リンカン号に突進して、3人は海中に落ちる。

そしてその生き物、すなわち潜水艦ノーチラス号に収容される。

ネモ船長は3人をもてなして、アロナックス教授にいっしょに深海の調査をしましょうといい、教授には、ネモ船長の隣の部屋や広間を自由に使っていいと言う。

11月8日。

東経137度15分、北緯30度7分。

日本の南の海(300海里=約556km)から東北東へ向け出発した。

ノーチラス号は海水から分離出来るナトリウムを利用してナトリウム電池で動いていた。
装甲は二重になっていて深海12000メートルより深く潜水出来た。

<ノーチラス号の構造>

全長70メートル。最大幅8メートル。排水量1500.72トン。

・中央部～船首、35メートル。それぞれ防水隔壁が間にある。

食堂5メートル。

図書室5メートル。

広間5メートル(羅針儀、圧力深度計、平面球形図)

船長室5メートル。

客室2.5メートル(アロナックス)。

空気貯蔵タンク7.5メートル。

操舵室、1.8メートル×3、中央に舵。

(ソナーや魚雷の装備はなし)

・鉄のハシゴで上部のボートに登っていくことが出来る。

船室2メートル。

調理室・船内食堂3メートル(海水から蒸留水を得る)

乗員部屋5メートル。

機関室20メートル(ブンゼン電池)。

スクリュー直径6メートル。1ピッチ7.5メートル,毎秒20回転。時速50海里(約92km)

窓ガラス厚み21センチ、耐水圧510気圧。

電気反射鏡、半海里先まで照明。

総費用1,687,900フラン。

世界中のいろいろな会社に用途を偽って発注した。

→最大速度も最大潜水能力も第二次世界大戦時の軍艦、潜水艦より圧倒的に上！

3人はノーチラス号の窓から見える海面下50メートルの景色見て、魚の名前を言い当てたりして興奮する。

1867年11月16日。

しばらくネモ船長の姿を見なかったが、自分の部屋の机の上に、クレスポ島での狩猟への招待状が置いてあった。

翌日、ネモ船長、アロナックス教授、コンセイユ、船員の四人は潜水服を着て、ルムコルフ灯を頼りに海底30フィートでノーチラス号を出て300フィートの深さまで進むと、そこにクレスポ島の森の入り口があった。水深150メートルほどの深さを絶壁に辿り着くまで歩き、クモガニに遭遇したり、ラッコやアホウドリを獲ったり、ティントレアというサメに会ったりしながら、ノーチラス号に戻った。

翌日11月18日。

20人ほどのいろいろな国籍と思われる船員が甲板に出て来て網を引き揚げるといろいろな魚が掛かっていた。タチウオというのは電気ウナギや電気ナマズに匹敵する電気を放つ。ネモ船長は、米国の海洋学者モーリー博士の言った通り、海にも川、動物の血液循環のような循環があるという。

「海水がもし塩分を含んでいなかったら、この水は陸地に降り注ぎ温帯地方は沈んでしまうだろう、地球全体の摂理に塩分は非常に大きな均衡の役割を果たしている、という。

滴虫類(極微生物/プランクトン)は80万匹集まって1ミリグラムになるくらいだが、塩分を吸収し海水中の固体要素を同化して石灰質の陸地の生成者としてサンゴ礁やミドリイシを作り出します。

鉱物質を奪われた海水は軽くなって海面に上昇し、そこで蒸発によって残った塩分を吸収して重くなり、再び下降して極微生物に新たな食物をもたらすのです。

それにより上昇と下降の二重の流れが生じ、絶えず動きがあり、絶えず生命があるのです。」

ネモ船長は「いずれは海底都市、海底住宅集落を作り、毎朝浮上させたい。」という。

そしてアロナックス教授に「大洋で一番深い深度はどのくらいか？」と訊き、アロナックス教授は「15149メートル」と答える。

11月26日、探検家クック船長が亡くなったサンドイッチ諸島(ハワイ諸島)に到達。

12月1日、西経142度で赤道を横切る。

12月4日、マルキーズ諸島を確認。

12月11日までに2千海里進んだ。その間にヤリイカの群れに会い、さらに難破したばかりで生きているような遺体を乗せたフロリダ号を発見した。

教授が「諸島が隆起して大陸になるかも」というと、ネモ船長は「地球に必要なのは新しい大陸ではなく、新しい人です。」と言った。

クレルモン・トネール島のミドリイシ(石灰質)の断崖300メートルは形成されるのに192000年かかる計算。

12月15日、ソシエテ諸島、タヒチ島。通算で走行距離8100海里。

トンガ・タブー島(いくつかの海難事故があった)を通過。

12月25日、ニューヘブリデス諸島。

12月27日、バニコロ島到着。

ラ・ペルーズ船長2隻の船の遭難現場を見る。

12月28日、ラ・ペルーズ島、パプア島。

1868年1月1日、コンセイユが教授に新年の挨拶。

教授「今はお年玉をあげられない。握手をしよう。」

コンセイユ「いままで一番うれしいです。」

1月2日、オーストラリア北東部岩礁地帯。走行距離11340海里(=5260里)。

1月4日、パプア島沿岸。ネモ船長、トレス海峡→インド洋へ。

トレス海峡はオーストラリアとパプア・ニューギニア島間の危険な岩礁地帯で、慎重にジグザグに走っていたノーチラス号だったが満潮時に岩礁に乗り上げてしまう。

かつてデュモン・デュルビルも座礁した暗礁地帯だった。

しかしネモ船長は5日後の満月を待つという。

1月5日、教授たちは小舟でゲボロア島周辺の岩礁を避けながらパプア島へ狩猟に向かう。

ノーチラス号のメニューに飽きてきていた一行は肉を食べたかった。

ヤシの実、リマ(パンの木)を見つけて大喜びする。ほかにもバナナ、マンゴー、パイナップル、サゴヤシ、シュロなど獲って戻る。

1月6日、またゲボロア島へ上陸。酔っ払った極楽鳥を生け捕りにし、ハト、ヤマバト、バリ・ウータン(ヘソイノシシ)、ウサギ・カンガルーを捕まえて食べていたら土人(パプア人)20人が集まり、100人に増え、ノーチラス号に戻ると500人くらいで囲んでカヌーでも接近した。

ネモ船長は平然としてノーチラス号の甲板入り口に電気を流して彼らをおいはらった。

1月10日、35海里の速さで航行。

1月11日、カーペンタリア湾の西側ウェッセル岬を回る。

1月13日、チモール海のチモール島？を通過。ワニを先祖と崇める王たちがいて、若い女性を生贄に差し出す風習もある野蛮な部族だった。

ネモ船長はノーチラス号を千メートル以上の深海に潜らせ一万メートルまでの海温を測定し、それがどの深さでも常に4.5度で一定であるということだった。

また海の濃度差についても測っていて、これは淡水を1として各海の密度を測っていた。

(例)太平洋1.026、大西洋1.028

1月16日、深さ数メートルでノーチラス号は静止する。

すると周囲を光を放つ滴虫類に囲まれる。

1月18日、船長と副船長が遠くの水平線を見つめて真剣に話し、望遠鏡で見ようとしたら険しい顔をして取り上げられて、3人一緒に船倉の小部屋に移された。

そして食事をしたら、睡眠薬が入っていたようでそのまま3人共寝てしまった。

1月19日朝、3人は自分たちの部屋に戻されていた。

ネモ船長に頼まれて、医師でもある教授はひとりの負傷者を診る。

しかし頭蓋が割れて脳が出ていて、あと2時間で死ぬと言うとネモ船長はすすり泣いた。

1月20日、ネモ船長は3人を海底のサンゴ礁の散歩に誘う。

サンゴはポリプ母体の上についた極微生物の集まりで、このポリプがひとつの生殖器をもち、発芽によってポリプを産む。つまり共同生活を行ないながら各々固有の生活を持っている。つまり、一種の自然の社会主義である。

樹状枝になって鉱物化するので、海底の石化した森とも言えた。

灌木のような茂みもあった。

そして海面下300メートルのところに行くとき々なサンゴがあつて絨毯のように広がっていた。

そこには赤い十字架が建てられていて、そこで船員4人で担いで来た遺体を降ろして穴を掘って埋めたのだ。

そこはノーチラス号の船員の墓だったのだ。

ネモ船長は「サメからも人間からも襲われることはない！」と言った。

この頃から教授はネモ船長が単に社会から逃避しようとしている天才というわけではなく、報復しようとしているのではないかと疑い始める。

ネッドは脱走したがっているが、教授は深海の探検を最後までしてみたいという気が起きていた。

1月21日、インド洋に向けて航行。

ウミガメ、フグ類、ハリセンボン、タツノオトシゴ、ウミテング、スフレ、オニカサゴ、アンコウなど多くの魚を観察出来た。

1月24日、ダーウィンとフィッツロイ船長が訪れたキーリング島で引網し、コレクションを増やす。

インド洋の測深部は13kmでも届かなかった。温度は沖合いより沿岸部のが低かった。

1月25日、幸運の前兆、フネダコ(別号ノーチラス,ポンピリウス)の大群と遭遇。

1月26日、東経82度で赤道を通過。サメに囲まれる。

1月27日、インド・ガンジス川ベンガル湾の入り口からたくさん死体が流れて来る。

ハゲタカの食べ残しで海に出れば今度はサメが食べるのだ。

夜、夜光虫(滴虫類)が海を牛乳のように白く染める。

1月28日、ネモ船長は教授にセイロン島で真珠を採りましょう、と誘う。

ただしサメがいる、とも。

教授はHCサー『セイロンとセイロン島人』を読み、コンセイユとネッドに真珠について語る。

ネッドはかつて女に真珠を贈ったが、その女は別の男と結婚してしまった、という。

コンセイユは「その真珠は塗料塗っただけの模造品だったに違いない」という。

1月29日、セイロン島とマンナル島の間で、ネモ船長と3人はゴムの潜水服を着て水深1.5メートルほどの浅瀬から海に入った。

そしてなだらかな斜面を降りていくと洞穴があり、その中には300キロはありそうなシャコ貝があった。ネモ船長はその中で一千万フランの価値はありそうな大きな真珠を育てているのだった。帰りにインド人の漁夫が海中を往復して漁より早めに真珠貝を収穫していた。そこへ大きなサメ(体長7.5メートルのツマグロザメ)が来て、尾びれで漁夫を昏倒させてしまった。ネモ船長はナイフをサメに突き立てて格闘するが海底倒れてしまう。そこでネッドが銚をサメに打ち込み、ネモ船長と漁夫を連れて漁師の舟に上がった。息を吹き返した漁夫に船長は真珠をあげたのだった。

教授はネモ船長は心の死んでいない人間であることを確認した。ネモ船長「教授、あのインド人は圧迫された国の人間です。私はまだ、いや最後の息を引き取るまで、そういう国の味方であるつもりです！」

1月30日、アラビアとインド洋の間オマン海、ペルシャ湾入り口を通過。
2月3日までオマン海をあちこち航海。
2月5日、紅海とインド洋の間にあるアデン湾。
2月6日、アデン通過。イギリスが造った要塞。
2月7日、バブ・エル・マンデブ海峡(涙の扉)に潜水で侵入。イギリス商船が行き交っていたため潜水。正午、紅海へ入る。
2月8日、モカを通過。回教寺院を見る。水深のあるテハマ沿岸へ近付く。
紅海にまつわる話。
2月9日、紅海で最も幅の広い場所、スアキンとクオンフォダの間を通過。幅190海里。
①毎年水位1.5メートル分の水を蒸発する。カスピ海や死海より多い。
②紅海の長さは2600キロ、幅は平均240キロ。
③観察出来た生き物。
イソギンチャク、クダサンゴ、何種類ものポリプ母体(海綿)、ヤリイカ、ビルガータガメ、アカエイ、ボカット、アオドン、ラクダフグ、ボラ、ブダイ、コガネモンガラ。
④蒸気船が出来るまで、紅海は深さに関わらず、特に東風が吹く時が危険だった。
⑤紅海が赤いのは、海藻が出すトリコデスミアという赤い粘性の物質のため。
⑥モーセ率いるユダヤ人が通過した場所はスエズの北で、今は砂地。
⑦古代セヌセルト一世(BC1971~1926)やネコ王(BC615)の時に地中海とアラビアとの間に運河を造る事業があった。ナポレオンもその付近まで来た。
⑧その後フランス人レセップスがスエズ運河を完成した。
⑨ジュゴンが棲む。

ネモ船長は教授に明後日に！地中海に入るといふ。
驚く教授に「スエズには海底トンネルがある」といふ。
紅海と地中海に共通の魚を発見して、海底で海が繋がっていると信じて発見したらしい。
「アラビアン・トンネル」

2月10日。
ジッダまで航行。
体長7メートルのジュゴンを発見。
ネモ船長はネッドに美味しいので獲ってみることを勧める。
ジュゴンを捕まえてみると体重は5トンあった。牛よりは不味く子牛よりはうまかった。
2月11日。
ウミツバメとナイルガモが食卓に並ぶ。
青い色の光を放つスエズの浮き灯台を見て「アラビアン・トンネル」に進入。20分で地中海に出る。
2月12日、3人で脱走の話をする。ひとまず延期。

ギリシャと小アジアの近海。

2月14日、ノーチラス号側壁開かず。進路はクレタ島。

その後開いて、ネモ船長とギリシャ諸島の生き物を観察。

アフィーズ・ハゼ(海のドジョウ,聖なる生き物)、タコベラ(美味)、コバンザメ(船を止める)、イッテンサクラダイ(聖なる魚)。

ロードス島とアレキサンドリアの間の深さ3千メートルの海盆・マタパン岬の潜水夫ニコラス、船長に合図。

船員たち、千キロの金塊と五百万フランのお金を入れた箱をボートで運び出す。

船内温度42度になる。

火山地帯のサントリン島付近を通過。

火山噴火を見る。

ネモ船長「太平洋では生き物が陸地を作っていたが、地中海では火山活動が陸地を作ります」

火山は鉄を含んだ岩を押し上げ、硫黄の臭いが船内にも充満した。

2月16日、ギリシャ沖を離れる。

2月18日、48時間600里(2400キロ)を連続航行してジブラルタル海峡を通過。以下詳細。

ジブラルタル海峡付近では難破船をたくさん見る。

ネッド案のボートを奪ってノーチラス号を脱出するのは、高速で走る列車から飛び降りるようなもので、出来なかった。

観察出来た生き物。

ナツメウナギ、エイ、シイラ(淡水・海水)、チョウザメ(美味)、マグロ、タラ、ウツボ、セポール・テニア、ツバメホウボウ、イットウダイ、カレイ、ニシン、ボラ。

マッコウクジラ、イルカ、アザラシ、6フィートのウミガメ(リユート)、ナラビクラゲ。

シシリー島とボン岬の間で海底に壁。

コンセイユ、軟体動物、関節動物の分類に勤しむ。

2月17日、地中海第二の海盆に入る。地中海でもっとも海難事故の多い地域。

アリジェリア沿岸とプロバンス地方の海岸の間は嵐がおおい。

2月18日、大西洋に流れ出る潮流を利用してジブラルタル海峡を通過。

海底でヘラクレスの神殿(石柱)を見る。

ノーチラス号は天候の荒れる中イベリア半島をポルトガル沿岸沿いに北上する。

ネッドは今晚ボートで脱出すると教授にいう。

教授はネモ船長と航海にまだ未練があり、船長の部屋を覗いてみると、ビクトル・ユゴーによって描かれた英雄たちの肖像画が飾ってあった。

コシュースコ(ポーランド)、ボツアリス(ギリシャ)、マニン(ベネチア)、リンカーン(アメリカ)、ジョン・ブラウン(アメリカ)。

ネモ船長は教授にスペインの歴史とビーゴ湾海底沈んだ財宝の話をする。

1701年、フランス・ルイ14世は孫のアンジュー公・フェリペ5世をスペインの王として押し付けていた。

それに対して、オランダ、イギリスオーストリアがハーグ同盟を結んでオーストリア大公カルロス3世をスペインの王位に付けようとしていた。

フェリペ5世のスペインは当時陸海軍共に手薄で、アメリカからの財宝(インカ帝国)がガレオン船で届けば何とかなる状態だった。

そしてそのガレオン船はカディス港に荷揚げされる予定だったが、同盟側が徘徊していて、一旦フランス側の港に荷揚げしようとした。

しかしカディスの商人たちがスペインに荷揚げするようにフェリペ5世に陳情し、荷揚げ予定地はビーゴ湾になった。

そこへイギリス艦隊が来てしまい、敗戦濃厚になったシャトー・ルノー提督は船ごと財宝を沈めた。

ネモ船長はその沈んだ財宝を引き揚げてクレタ島経由でどこかに送っているのだった。

教授はネモ船長がその莫大な財宝で虐げられた人たちを助けていたことを知ったのだった。

2月19日。

ノーチラス号は南南西に向かって、イベリア半島からは150里あまり離れてしまった。

夜11時、ネモ船長は教授だけ海底の散歩に誘った。

西経16度17分、北緯33度22分。

深度300メートル。

海底はなぜか明るく、その2海里ほど先の灯りを目指して2時間くらいかけて700~800フィートの高さを登ると、眼下に火山活動が見られ、そして海底に沈んだ都市、港パルテノン神殿があった。

ネモ船長は白亜質の小石で「アトランティス」と書いたのだった!!

2月20日、コンセイユを相手に昨日の話始めるがコンセイユは歴史よりも魚の方が興味があり、窓から見える魚をいっしょに観察する。

2月21日、朝8時に起きたつもりだったが甲板に上がると暗かった。

そこは死火山の中でノーチラス号の秘密基地だった。

海底下10メートルの水路を通してだけ入って来ることの出来る場所だった。

豊富な石炭があるという。

通常は石炭を利用して、ノーチラス号の原動力となるナトリウムを生成するが、今は急いでいるので、備蓄のナトリウムを積み込むだけにするという。

教授はコンセイユとネッドといっしょに死火山の中の湖の周りを周る。

そして途中でミツバチの巣を見つけて蜂蜜を採り、ノガンを一羽獲り、植物のセリをリュックに詰めてノーチラス号に戻った。

2月23日から3月12日の19日間からノーチラス号はメキシコ湾流の中でも、北緯44度から南を周回する流れに乗る。

沈んだアトランティス大陸を覆うような流れでサルガッソー海と呼ばれている。

サルガッソーはヒバマタの意味で、海草が浮島を作っている。

アンデスやロッキーからの草や難破船の残骸などが鉱物化して沈み海草が絡むため、ノーチラス号も深くは潜れなかった。

ここで観察された生き物は、ウミケイトウ、イソギンチャク、キュビエ根口クラゲ、シマザメ、ベルロンツノザメ、アオザメ、マイルカ、トビウオ、セミホウボウ。

3月13日、フリゲート艦コングレス号のパーカー大尉が深度測定をして15,140メートルまで測ってもなお海底に達しなかったポイントに来た。

南緯45度37分、西経37度53分。

ネモ船長はどこまで深いかの調査をするためノーチラス号を潜水させた。

確認できた生き物はカグラザメ、テレスコープ、キホウボウ、ソコタラ。

教授とネモ船長の深海知識まとめ。

- ①海の深層に行くとき先に姿を消すのは動物より植物。
- ②ウバザメとカキは深度2000メートルで生きていること。
- ③ヒトデは2500~4000メートル。
- ④塩分と密度の相違によって縦の流れが出来て原初的な生命を保つ。
- ⑤海水中の酸素の量は深くなるほど減少し、浅くなるほど窒素の量が多い。

ノーチラス号は深度16000メートルに達した。船側の受ける気圧は160気圧=1600kg/cm²。

ネモ船長は写真を撮り、急速浮上する。

3月14日。

南に向かっていた。

ネッドはノーチラス号に何人乗員が乗っているのかと教授に計算を求める。

1人が24時間で吸う空気の量を2400リットルとしてノーチラス号の体積から計算すると600人以上は乗れる、と聞いてネッドはガッカリする。

そのうちにナガスクジラが近付いて来て、ネッドはネモ船長に捕鯨の許可を求める。

しかしネモ船長はナガスクジラは温厚で他にもマッコウクジラ、メカジキ、ノコギリザメといった敵がいるので、そのうちのひとりになる必要はない、ただ殺すだけの野蛮な行為をするな、という。

そこへマッコウクジラの群れが近付いて来てナガスクジラに襲いかかろうとしていた。

ネモ船長はあの獰猛なマッコウクジラなら全部殺してもいい、といい、ノーチラス号は潜水して衝角でマッコウクジラの群れと戦い追い払った。

マッコウクジラに殺されてしまったナガスクジラの母乳を樽に入れてノーチラス号は再び航海を続けた。

3月15日、南緯60度。かつて英米の捕鯨漁師たちがアザラシを絶滅寸前に追い込んだ。

3月16日、南緯67度。氷床に阻まれて身動き出来なくなる。羅針儀も狂い始める。

しかしネモ船長は潜水で南極点まで行くといい、教授も前向きにアイデアを出す。

ノーチラス号は大量の空気をタンクに詰めて潜航する。

外気温、マイナス12.5度。氷の下には魚は見当たらなかった。

3月19日、浮上して何度も氷床に下からぶつかり、ついに氷の無い海に到達する。

周囲8キロほどの小さな島の周りを歩き、水路の向こうに大きな陸地を発見しそこまでボートで向かって上陸する。

3月20日、太陽はどの方向にも見えない。

3月21日、春分の日の正午、望遠鏡で太陽の下半分を確認して、ネモ船長南極点、南緯90度に到達したことを宣言。南極は6ヶ月の夜に入る。

観察した生き物。

植物:地衣類、珪藻類、ヒバマタ

軟体動物:貽貝、ジンガサ貝、キバ貝、ウキビシ貝

植虫類:サンゴ樹、ウミケイトウ、ヒトデ、サルバ

鳥:ペンギン、サヤハシチドリ、アホウドリ、ウミツバメ(脂が多い)、ダミエ鳥

魚:ウグイ、ギンザメ

動物:アザラシ、セイウチ(漁師たち無分別な狩猟の的)、ゾウアザラシ(胴回り6m、体長10m)、セミクジラ、ザトウクジラ、ナガスクジラ。

3月22日、深度1000メートルに潜って北上。

途中でノーチラス号の下の氷塊がひっくり返って上の氷床との間に挟まれてしまう。

300メートルまで浮上。

両側にサファイア、エメラルド、ダイヤモンドを思わせる氷の輝きを見ながら、氷のトンネルを進む。

ずっと脱出たくてイライラしているネッド

「わしは他人の考えに無理やり賛成させられると、かっとなるんですがね。こればかりは見たことのある人間はいますまい。」

コンセイユ

「陸地に戻ったら自然の驚異をこれほど見たために無感動になってしまって、あのみじめな陸地や人間の手が作り出したみすばらしいものなど見て、どんな気がすることでしょうか！」

北側出口は無く、後進。しかし南側出口も無く、ノーチラス号は停止した。

ネモ船長

「このままでは氷に押し潰されるか48時間後に空気が欠乏して窒息死」

氷の薄そうな10メートルくらいの所(ノーチラス号の下部)を選んで、全員でツルハシで掘削作業開始。

砕けた氷がマイナス6度の海水温で再び凍り、ノーチラス号の上と両側から氷が迫って来る。

船内で水を温めて、周囲の海水温度をマイナス2度に保ち凍るのを防ぐ。

船内の炭酸ガス濃度が上昇して、みんなあくびをしたり、息苦しくてやがて頭痛、めまいがして来る。

酸素は水を分解すれば作れる。しかし吐き出した炭酸ガスは苛性カリを容器に入れ、それを絶えず動かしていなければならない。

3月28日、ノーチラス号は海水タンクを満たして、あと残り1メートルの厚さを1万キロの荷重で破壊し、氷のトンネルを脱出。

時速40海里で疾走して、氷原を砕いて氷の表面に飛び出した。

酸欠で気を失っていた教授は恐らくネッドが甲板に運んでくれたのだろう。

3月31日、アメリカ大陸南端のホーン岬。

4月1日、ティエラデルフェゴの海岸と、頂上が雲に覆われているか否かで晴雨の分かるサルミエント山。

長さ300メートル、太さ親指ほどの巨大なヒバマタ、ベルプという海草。

フォークランド諸島通過。

4月3日、パタゴニア海域を航行。ラプラタ川通過。

4月4日、ウルグアイの50海里沖。西経37度で南回帰線を横切りフリオ岬沖通過。

4月9日、南アメリカ最東端のサンロケ岬。そことアフリカのシエラレオネの間の海底の谷を進む。

4月11日、アマゾン川の河口。

4月12日、引き網。

植虫類:フィクタリン、フィクタリス・プロテクスタ(イソギンチャク)

軟体動物:キリ貝、マクラ貝、サソリ貝、ガラス貝、フネダコ、コウイカ、ヤリイカ。

魚:プリカヤツメウナギ、イトマキエイ、スリッパ作り(サメ)、コガネモンガラ、キュラサアビン、カプリスクス、パッサン、イワシ、サバ、黒セントロノート、カリゾプテール、金尾タイ、スパールポプ、イシモチ、黒ニザダイ、スリナムヨツメウオ、シビレエイ。

マロニ川河口のオランダ領へ。

カイギュウ、マナティ。熱帯地方の河口を塞ぐ恐れのある海底の草の繁茂を防ぐ。

腐敗した草は空気を汚し黄熱病の原因となった。

コバンザメを使ってタイマイ(ウミガメ)を捕獲。

4月16日、マルチニク島とグアドループ島付近通過。

植虫類:カツオノエボシ。

魚:モリュバール・エイ、アメリカ・コガネモンガラ、ミサキスジハゼ、サバ、ヒメジ、キンスズメダイ、ハクシャダイ、コノシロ、ボラ、コレゴヌス、アカマンボウ。

ウミユリ、ヒトデ、クラゲ、ニシキウズ貝、クノット貝、スカシ貝。

4月20日、バハマ諸島近海。

断崖で大きな海草、巨大なコンブ、ヒバマタ。巨人国の果樹園。

ヒシガニ、ムラダキガニ、クリオスガニ。

ノーチラス号のスクリューなどに体長8メートルくらいのタコたち10数匹が絡みつく。

浮上してみんなで甲板に出て戦うが船員1人が巻きつかれて死亡。

船員はフランス語を発した。

タコを追い払った後でネモ船長、またすすり泣く。

5月1日、バハマ水道入り口を北上。

メキシコ湾流に乗る。

暖かいメキシコ湾流がヨーロッパの沿岸を緑の草で覆う。

魚:ハイイロベラ、シナーグルタイ、イシモチ、シイラ、オウム魚、ブレミ・ボスキアン、青ロンブ、バトラコイド、コブスジハゼ、ディプテロドン、サケ、ボラ、シュバリエ・アメリカン。

メキシコ湾流の水のリン光。

5月8日、ノースカロライナ州ハッテラス岬。天候悪く脱出断念。

ネモ船長に船を辞したいというが、この船に乗った者は去れない、と言われる。

5月18日、ロングアイランド島と同緯度、ニューヨーク水道から数海里のところで、ネモ船長は甲板で自身をロープ繋ぎ嵐の中立っていた。

ハリケーン風速は秒速45メートル、波の高さは15メートルだった。雷を伴う嵐の王だった。

日本では安政大地震の時(1864年12月23日)、このような大波が来て時速700kmで進んだ津波がアメリカ海岸にその日じゅうに達したという記録もある。

この嵐で海底に多くの船の残骸を見た。

5月15日?ニューファンドランド堆の南端に近付いた。

魚:ダンゴウオ、ウネルナック、カラック、ギンボ、ミサキスジハゼ(キタノマツカサ)、ソコドラ、オニカサゴ、ウグイ、ボスキアン、スナシャコ、タラ。

北緯42度、大西洋横断通信ケーブルの起点・ハーツコンテンツと同じ緯度に達して通信ケーブルを見た。アイルランドを迂回。

5月30日イギリス最西端ランズエンド岬。

6月1日、深度833メートル海底に静止。

ネモ船長、遭難したマルセイユ号の話をする。

その船はイギリス艦隊と戦って沈んだバンジュール号(復讐者号)だった。

ネモ船長はその名を美しいという。

大型の軍艦がノーチラス号に発砲しながら近付いて来た。

ノーチラス号は衝角戦で撃沈してしまう。

ネモ船長は妻子と思われる写真に跪いてすすり泣く。

「万能の神!もうたくさんです!もうたくさんです!」

3人はいよいよ脱出を実行に移すことにする。

ノーチラス号はその後どこをどう走ったかわからなくなってしまう。

3人はボート乗り込み、ネッドが自在スパナで船室を閉めて、ノルウェー沿岸のメールシュトレーム(大渦巻き)に巻き込まれてしまう。

気がつくと3人はロフォーテン諸島の漁師の小屋に横たわっていた。

ノーチラス号もネモ船長もどうなったか分からない。

復讐の念を消して学者として海の探検を平和に続けてほしい。

<メモ>

単位:

リュー=4444メートル。

里=3927メートル。

海里=1852メートル。緯度一分に相当。

尋(ひろ、じん)=6尺。

生物の分類:

門/亜門/綱/亜綱/目/科/属/亜属/種/変種

南北戦争の時の米国海洋学者、マシュー・ファウンテン・モーリー。

現在、マリアナ海溝の最深部は10900メートル余りとされている。